

北辰（北極星と北斗七星）に係る信仰

南北子午線縦軸の神聖化の肝に当たる「北極星と北斗七星」（北辰）に焦点を当てます。

1. 北辰（北極星、あるいは北斗七星、あるいは北極星と北斗七星）信仰

元を質せば、密教経典『仏説北斗七星延命経』にあるとのこと。

その1；私は、毎日祭壇（神棚＋仏壇）に向かい勤行する中で次の一説を唱えています。

・・・北側（水気の神）を向いて、「豊受大神、南無阿弥陀仏、天照皇大神」「北の北極星・北斗七星様、ならびに西国^{さいごく}へんろ様のご加護に感謝申し上げます」と口上し、・・・
なぜ、『北極星・北斗七星』なのか、この理由について簡単に記述します。

その2；まずは、東西南北に係る配置のことについて、宗教学者の山折哲雄氏著書「山折哲雄の新・四国遍路」（PHP 新書）から拝借します。

・・・日本は農耕社会ですから太陽と月の恵みを中心に世の中を考え、統治するとい仕組みができていた。そのため、東西の軸を大切にした。一方、中国大陸では、天帝というのは北極星を背負い、・・・北極星の位置に座って、南を向いて政治をするとして、北極星を中心とした南北の軸に基づいた世界観が優勢であった。・・・

その3；次に民族学者の吉野裕子^{ひろこ}さんの説を参考にします、古来の世界観は東西軸重視——月や太陽だけではなく、地球上で観測される天体はすべて東から西へ移動するが、これは地球の自転によって天体がこのように動いて見えるため——でありました。しかし、ある時期から南北軸重視に移行した思想を多数の著書で解説しています。

宇宙根源の普遍的・絶対的「^{いつ=ひとつ}一」を意味する「太一」「太極^{たいきよく}」は北極星と習合した、天子・天帝（天皇大帝）の住む場所と云われた。それらを神格化・神霊化したのが北極星であるという。なぜかという、北極星は天の北極にあって動かない——科学的には色々あるが、天空の星は北極星を中心に回っているから、つまり、『不動の星』であります。

一方、北斗七星は北極星を中心に、左回りに、1時間に15度（ $360 \div 24$ ）ずつ動き、一昼夜（24時間）でその周りを一回転し、一年でその柄杓^{ひしゃく}の斗柄^{とへい}（剣先・柄）は十二支方位（360度／全方位）を指す、つまり、1か月に30度（ $360 \div 12$ ）ずつ回転します。天文学では周知の事実であります。よって、3か月で90度回転します。

その4；前出吉野裕子^{ひろこ}さんの言説によると、北斗七星の徳として、その回転軌道から、北斗は絶対に止まらない天の大時計にして日月・陰陽、夏冬を分け、四季との推移と二十四節気の調整

を司り、農耕の基準を示し、民生の安本（経済安定本部）を保証する徳を有するということです。

《歴史&宗教 No027》に記述するが、北斗七星の斗柄（剣先）は四季節目（春分・夏至・秋分・冬至）においては、東西南北を向くようになります。

その5；非常に平たく言うと、社長（北極星）と従業員（北斗七星）の関係のようです。ただし、社長はnoblesse oblige（仏: noblesse oblige＝高貴さは義務を強制する）の人徳者であり、従業員は愛社精神に長けた人との関係に比喻です。

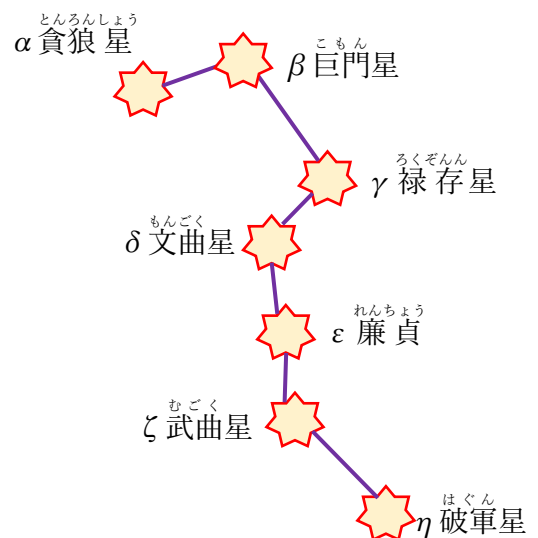
日本では、伊勢神宮の信仰と結び付き、その内宮は北極星と習合し、外宮は北斗七星と習合し、伊勢は、今も年間を通して、北斗七星の動き（位置）に合わせて様々な祭祀を行い絶大な信仰を集め今日に至っています。

その6；七（7）に繋がる北斗七星は、「ナナツボシ」とか「ナナヨノホシ」、あるいは、^{ます}杓の四星と柄の三星から「四三の星」とも謂われる。また、^{ます}杓の四星を頭部の「魁」と、柄の三星を尾部の「杓」とも呼ばれる。さらには、動く丸い車を持った交通機械と見做し「^{せんきぎよくこう}旋璣玉衡」とも。また、全体的には「柄杓」の形や大匙の形にも見える。私は星と言え、北極星と北斗七星しか確たる見分けが付かない。

2. 星宿思想

図－1を参照のこと、妙見信仰の本尊妙見菩薩は他のインド由来の菩薩とは異なり、中国の星宿思想から北極星を神格化したものということです。よって、北極星あるいは北斗七星は、妙見菩薩の化身とされました。

北極星は全宇宙を支配し、その下の格となる北斗七星は人間の運命を掌る神と崇められて来ました。つまり、個人の運勢、寿命や富貴貧賤等に直接係るとされて、星宿信仰が浸透しました。このような信仰は、様々な宗教が混淆する中で生まれたということです。



図－1

3. 天台密教と「摩多羅神」信仰

ネット「神秘主義思想史」(<https://morfo.blog.ss-blog.jp/>)を参考に要点を拝借します。

その1；図－2は天台密教に係る「摩多羅神」の曼陀羅が描かれています。「摩多羅神」は「阿弥陀如来」の来迎を準備する神、つまり「阿弥陀如来」の垂迹神です。

狩衣を着た俗人姿の老翁で、鼓を打っていて、その頭上には北斗七星が描かれています。その

左右には、二人の童子——摩多羅神の右隣（向かって左）に「爾子多」、摩多羅神の左隣（向かって右）に「丁令多」がいて、それぞれ左手に茗荷、右手に竹葉を持ち、踊っています。二人の持つ植物の意味については諸説あります。

□^a説 茗荷と竹は最澄が延暦寺の根本中堂の庭前に植えたものであるとされ、茗荷は普賢菩薩の無分別智を、竹は文殊菩薩の分別知（認識主体と認識対象を分けること）を表すともいう。

□^b説 茗荷は「周利槃特の愚鈍」や三毒を、竹は邪智や(注)三観を、二つで迷悟の元にあることを表すともいう。意味は、摩多羅神は「十波羅蜜」（修行の課程）の鼓を打って、童子に「十界」（人間の心の境地を十種に分類したもの）を舞わせている、とも言われます。

(注) 天台宗における「一心三観」のことです。一切の存在には実体がないと観ずる¹空観と、一切の存在は仮に現象するものであると観ずる²仮観と、この空仮の二観を別々のものとし、しない（この二つは一つであるとする）³中観との三観を、一思いの心に同時に観じ取るということ。この三観は優劣なく全て等しいとする見方です。

□^a説と□^b説は、反対・矛盾のような、齟齬があるような解釈にみえますが、人間は単純なものではないということについて、私の言う「仏魔同居」の境地を難しく宗教学問的に述べているものと思っています。

以上を整理したのが図(表)－3のとおりということです。



図－2

(三尊)	(本地)	(三観)	(八識)	(性)
・摩多羅神	阿弥陀	中	阿頼耶識	
・ ^に 爾子多 (右)	観音菩薩	空	末那識	大便・男性器・男色
・ ^て 丁令多 (左)	勢至菩薩	仮	意識	小便・女性器・女色
図(表)－3				

その2；道教にある「人間の靈魂は三魂七魄^{さんこんはく}で出来ている」とする説と摩多羅神との習合についてです。魂は精神を支える氣、魄は肉体を支える氣を指した。「魂魄」は人間の体内にあって生命活動を^{つかさど}り、行為の善悪を監視する体内神の一つとされました。本来は、三魂は死後分離して、天魂（死後、天に向かう）、地魂（死後、地に向かう）、人魂（死後、墓場に残る）に分かれるとのこと。そして、七魄は喜び、怒り、哀しみ、懼れ、愛、惡しみ、欲望から成り立っています。このような道教思想が摩多羅神と習合し、次のような解釈を加えたのです。

□¹「三魂」は、「三台星」（本体は阿弥陀如来三尊）、つまり、日、月、明星（金星）のことです。明星は、「明」が「日+月」なので、煩惱と菩提を止揚する中道なのです。

□²「七魄」は、「北斗七星」のことです。

占術研究家マギーのサイトを参考にすると、人間は、北斗七星の本命星^{ほんみょうしょう}（生まれた月^{げんしんしょう}から求める星。生命の源である太陽（日）の氣を受け、行動的な面を掌っている。）と元神星（生まれた日^{げんしんしょう}から求める星。満ち欠けする月の氣を受け、内面的な側面を掌っている。）の精が父・母に降りて、赤白二水（精液、経血）となって生まれます。そして、死ぬとそこに帰るのです。生年月日の月日とその発出エネルギー（太陽と月）を交換している処は面白いと思います。

4. 天皇まで影響した北辰信仰
天皇の礼服のことです。今は図
- 3 のとおり、束帯装束^{こうろ}の黄櫨^{げんのごほう}染御袍です。



図- 3

しかし、江戸時代までは図-
4 のとおりでした。



図－４

「<https://www.wikiwand.com/ja>」より拝借したものです。孝明天皇（明治天皇の父）の
 袞衣、あるいは、こんいという。同図は最高祭服で、前側、左右の肩に日月が、背中側首の所
 （後ろ衿の下）には北斗七星（星辰）が大きくはっきりと描かれています。天皇即位にかかわる
 即位儀礼や大嘗祭は、天皇の王権を象徴する代表的な儀礼であるが、その場に限って着用された

ものです。着用する天皇は北極星の身（立場）で、前で頭に近い方に宇宙の両眼なる「日（三本足鳥）」と「月（蟾蜍と兎）」を、後で頭に近い方に北斗七星を背負う形となります。

なお、この日・月・星辰三体の意味合いは、「照臨無私」です。照臨^{しょうりん}とは、太陽や月が下界を照らす意から、

- ・神仏が人々を見守ること、照覧。
- ・君主が国土・人民を統治すること、君臨。などです。

したがって、私心無く、無償の愛を以って国土・人民を統治することの意を表現します。

なお、元は中国皇帝の専用漢服、礼服の一種で「天子御礼服」ともいうそうですが、配置された文様は、細部について日本風にアレンジしているとのこと。

=====

《思うところ》

日・月・星辰そのものに、人間界の欲望を実現する力は科学的にはもちろんありません、そんなことは古代から人間は分かっていました。しかし、人知を超えた自然の（無限の、神仏の）力——毎年繰り返される春夏秋冬四季の運行、雨露霜雪、潮の満ち引き、樹木の繁茂、動物・鳥獣の生息・・・の源になるのは、日・月・星辰、すなわち大宇宙なのだと思ったのでしょう。宇宙の存在に畏敬の念を強く持ったというのはとても頷けます。そういう測り（量り）知れない日・月・星辰に理想郷を重ねた、人間有り様の理想精神を重ねたというのは当然のことでしょう。私の遊び心の世界では日・月・星辰に憧れを感じます。娑婆の生身の人間はどんな人も有限値！地球上77億人分の1の存在を忘れ、一人では雨1粒も降らせること出来ないくせに、何かにとオレ我オレ我と傲慢炸裂するのが人間です。そんな人間が人前でどんな立派なことを言おうが、私は信用するはずは微塵もありません。

(end)